

日本環境文化史に関する研究（その12）

宮 本 武 蔵 の 視 点

—二分法超越世界の根源にあるもの—

稲 場 紀久雄

目次

- 第1節 はじめに
- 第2節 武蔵の残影を訪ねて
 - 2-1 小倉の武蔵顕彰碑
 - 2-2 武蔵の墓碑と供養塔
 - 2-3 霊巖洞と屋敷跡
- 第3節 武蔵の生涯と人間像
 - 3-1 武蔵の生涯
 - 3-2 武蔵の人間像
- 第4節 武蔵の生と死—二刀流と武士道—
- 第5節 武蔵の現代的意義—主観環境学への示唆—

第1節 はじめに

私は、子供の頃から宮本武蔵が好きだったが、今から思えば二刀流の剣豪・武蔵の強さと格好良さに魅せられていたに過ぎなかった。この10年余り、生命環境経済学や主観環境学の体系化に取り組むようになってから、『五輪書』を通して武蔵の考え方に接し、思想家としての重要性に気がついた。武蔵は、二分法超越思想を二刀流というユニークな剣法として具現化した。二分法超越社会の創出は、私の生命環境経済学や主観環境学の究極の目的である。さすれば、宮本武蔵は、私が志向する学問体系の始祖の一人と位置づけられるわけである。ここに至って、武蔵は、私にとって子供の頃の一介の剣豪では無くなった。

新しい武蔵像が私の脳裏に描かれ始めた。私の武蔵像は、ルネサンス期のマキアヴェリ（1469～1527）とレオナルド・ダ・ヴィンチ（1452～1519）を合わせたような人物に近い。武蔵は、彼等二人に遅れること約百年、極東の一隅に誕生したが、彼等二人と同じように激動の時代に、自由闊達な精神活動によって多様な才能を開花させた天才であった。

私は、3年前（2001）の9月、武蔵の残影を求めて、小倉と熊本取材した。さらに、昨年（2003）は、NHKテレビが日曜日の大河ドラマに『武蔵』を取り上げたため、宮本武蔵に関する本が数多く刊行され、一種の武蔵ブームの観を呈した。私は、出版された本のほとんど全てに一応目を通したが、中でも三冊の優れた武蔵研究書（後述）に接し多くを教えられた。取材や本から浮かび上がった武蔵像は、いわゆる吉川英治が描いたそれと

は全く異なるものだ。だから、と言えは言い過ぎだが、私の評価では従来のイメージを超えられなかったNHKの『武蔵』の視聴率は低迷し、かくいう私も初回をみただけで、興味が失せた。武蔵には剣豪と言うイメージを超えた現代的意義が潜んでいる。五感を研ぎ澄まし、武蔵の声を聞いてみたい。この論文は、このような願望に立ち、私の視点で武蔵の生涯、その人物及び思想を吟味し、武蔵という人物の現代的意義を考えたものである。このため、他の識者の論調と違っている点が多々あることを予めお断りしておきたい。

第2節 武蔵の残影を訪ねて

武蔵の残影を求めて3年前(2001)の9月6日から8日まで九州の小倉と熊本を訪ねた。小倉には武蔵の養子・宮本伊織が建立した武蔵顕彰碑がある。熊本は、武蔵の終焉の地である。複数の墓地があるばかりでなく、畢生の名著『五輪書』の最初の筆を下ろした霊場・霊巖洞がある。

2-1 小倉の武蔵顕彰碑

9月6日昼前、小倉は雨に降り込められていた。顕彰碑のある手向山は、小倉駅と門司駅の間辺りの海岸沿いにある。地図によれば、駅前からバスで行ける。

私はバス停を探し、「手向山に行きますか」と運転手さんに尋ね、うなずくを見て、乗り込んだ。手向山は低い丘で、頂上が公園になっていた。



[写真-1] 小倉の武蔵顕彰碑

顕彰碑は、公園の中にあり、高さ4メートル、幅1メートル以上はある巨大な一枚岩だった(写真-1)。碑文の表題は「兵法天下無双」、上部に1行2文字で、「天仰実相円満兵法逝去不絶」と大きく刻まれている。碑文は漢文で、碑面全体にびっしり刻まれ、文字数は千百字程度。目を凝らして碑文を読み進むうちに、雨はい然と強まり、辺りは薄暗くなった。雨を避けて顕彰碑正面の林の中に避難したが、そこから関門海峡が指呼の間に見渡せた。顕彰碑は、海に向かって建てられていたが、その海峡の向こうには下関、さらに巖流島が横たわっている。顕彰碑がこのような位置関係で建てられていた事実には、重要な意味があったのではないか。武蔵は、熊本では細川公が参勤交替で江戸に向かう街道沿いの墓地に、鎧、兜を身につけた完全武装のいでたちで、江戸の方に向かい、床几に腰かけた姿で埋葬されたと言う。英雄豪傑の象

徴として、いわば仁王尊のような役割を果たしたのかもしれない。

碑文を書いた人は、細川家の菩提寺・泰勝寺の当時の住職春山禅師である。この人は、武蔵の藩葬の際に武蔵に引導を渡した僧侶であった。春山和尚は、武蔵とこのような因縁で結ばれており、伊織と相談して碑文を書いた訳だから、内容は正確と考えるべきだろう。

今回この論文のために碑文を読み返して、次の二点の重要性に気がついた。

第一点は、「播州赤松末流新免武蔵玄信」という部分である。「播州」とは播磨の国で今の兵庫県の瀬戸内海側の地域、「赤松末流」とは足利幕府を支えた武門の名家・赤松一族の子孫であるということ、そして「新免武蔵玄信」は本人の姓名だが、「宮本」でなく養父の姓「新免」を名乗っている点が目を引く。武蔵は、『五輪書』の中でも自分を「新免武蔵」と名乗っている。

赤松一族は、室町時代に播磨の守護職として権勢を誇った武門の名家であった。筑前（福岡）を領した黒田家の祖とも言うべき黒田官兵衛は、元は赤松麾下の武将であった。肥後（熊本）を領した細川家も、その祖と仰がれる細川藤孝は、第15代將軍足利義昭を最後まで守つた武将であった。筑前も肥後も九州の大藩で、前者は長州の毛利に対する、後者は薩摩の島津に対する備えとして重要な存在だった。豊前小倉藩は、筑前と肥後の間に挟まったカスガイのような存在で、九州探題の役割を担っていた。藩祖小笠原忠真は、徳川家康の外孫で、小笠原家は徳川家と特別な関係にあった。小倉藩は、筑前及び肥後と適切な関係を確立しないと、探題としての役割を果たせないの、両藩に対しては細心の工作を怠らなかった。

宮本伊織は、15歳の時に播磨明石の城主だった小笠原忠真の近習となり、才能を認められ、20歳にして家老に昇進した逸材であった。その養父が武蔵だが、実は伊織の実父の弟、つまり叔父に当たる人であった。二人は、共に赤松の末流だったわけである。伊織が藩主忠真から拝領した手向山の山頂に武蔵顕彰碑を建立し、忠真がまたその企図に同意したのも、豊前小倉藩が赤松一族と関係があることを示したかったのではないだろうか。そこには、九州探題として、九州地方の安定を保持しなければならない豊前小倉藩の何らかの意図が働いていたに違いない。このように考えると、武蔵－伊織父子は、政治的なフィクサーのような位置を占めていたように思えて来る。少なくとも、武蔵の存在が政治的安定の上に何がしか役立つと考えられたのだろう。結果論かもしれないが、九州全体を俯瞰した場合、二人の政治上の位置は、単なる一介の剣豪が思い及ぶようなものではない。私には武蔵の真骨頂がここに透けて見えるような気がするのである。

第二点は、引用が長くなるので、該当部分の要旨を現代文で書くことにしたい。即ち、武蔵の養父「新免無二は、十手術を伝える家の当主で、武蔵もその跡を継いだ。十手は、太刀の倍も有利だが、あくまで非常用の武器である。そこで、何とか刀をもって十手に変えられないかと工夫し、二刀流を考案した」と記された条（くだり）である。武蔵が若くして武者修業の旅に出ざるを得なかった理由は、父との関係が陰悪だったためだという説がある。碑文を見る限り、とてもそんな風には思えない。自分の姓として宮本でなく「新免」を名乗り、養父の伝える十手術を基に二刀流を考案し、さらには養父と同じく京都の

吉岡一門と対決して打ち破ってもいる。そこには「無二」、つまり「二人としない剣客」と仰がれた養父・新免無二への深い敬慕の念がうかがえる。だからこそ、遺書とも言える『五輪書』に自らの姓を「新免」と書き記したのではないのか。

手向山の登り口の近くに宮本家代々の墓地があった。元は武蔵顕彰碑の側にあったらしいが、昭和20年山頂に陸軍の砲台が築かれた際に現在の場所に移された。案内板によると、伊織は島原の乱で勲功を立て、禄高が2千5百石から4千石に加増された。武蔵は、この時、小笠原軍の軍監として出陣していたから、伊織の勲功とも無縁ではなかったろう。伊織は、当時弱冠26歳の若武者ながら、武蔵に劣らぬ優れた人物だったに違いない。墓碑に『忠厳紹徳居士』という戒名が刻まれているところを見れば、藩士の人望が厚かったのかもしれない。

それにしても小倉という街は、無法松が活躍した舞台であり、文豪・森鷗外が陸軍第12師団の軍医部長として不遇をかこつた地であり、さらには松本清張が芥川賞受賞作『或る「小倉日記」伝』を書いた所でもある。小倉は、文学的な色彩の強い街だが、熊本もこの点では遜色がない。夏目漱石が五高教授として教鞭を取り、『草枕』の舞台ともなった温泉地も近い。私は、小倉から有明35号で一路熊本へと向かった。熊本に着いた時は、日もとっぷり暮れ、雨がかなり強く降っていた。ところが、翌朝は昨日の天候が嘘のように清々しく晴れ渡った。

2-2 武蔵の墓碑と供養塔



〔写真－2〕 東の武蔵塚にある墓碑

熊本には、武蔵の残影を偲ぶ史跡が少なくとも5箇所、そして武蔵の芸術作品や関係資料の展示で有名な島田美術館がある。史跡は、東の武蔵塚、泰勝寺の五輪塔、西の武蔵塚、金峰山山中の霊巖洞、そして武蔵の熊本城内の屋敷跡である。最初の三箇所は、武蔵の墓碑がある場所で、中でも西の武蔵塚の墓碑には武蔵の戒名と史実の全く分からない不思議な女性の戒名とが並んで刻まれている。私は、かねてからこの墓碑をぜひ見たいと思っていた。

先ず東の武蔵塚を訪ねた。墓碑は、JR豊肥本線の武蔵塚駅から徒歩で10分位の所にある武蔵塚公園の中にあった（写真－2）。高さが3メートルはある立派なもので、上部には大きな円が刻まれていた。特に印象的だったのは、花生けの正面に『一劔護民』という四文字が刻まれていたことだった。この言葉

を中心に据えて『五輪書』を読むと、晩年の武蔵の思索を追体験できるのではないか、そんな思いにとらわれた。公園には、武蔵の銅像や高弟に遺品として贈った人生訓『独行道』を浮彫りにした記念碑等が建てられていた。公園は、県道に面してきちんと整備され、武蔵ファンの多さを感じさせた。武蔵の葬儀は藩葬だった。墓地に向かう葬列は、辺りに響く遠雷の音に“希代の豪傑逝く”の思いに囚われ、肅然と襟を正したと伝えられている。私は、当時の情景を想像しつつ、武蔵の亡骸が埋葬される場面に思いを馳せたのだった。

泰勝寺は、熊本大学の裏手の立田自然公園の中にある。大学の側の立田山入口から公園の方に歩いて行くと、先ず武蔵の引導石に出会う。春山禅師がこの石の上に武蔵の棺を置かせ、引導を渡したと伝えられる。葬儀の導師を勤めた人は、住職の大淵和尚で、この人は武蔵と昵懇の人だった。春山禅師は、武蔵より34歳も年下だった。引導を渡すべき役割は大淵和尚にあるはずだが、敢えて春山に引導を命じたのには理由があったはずだ。恐らく、大淵和尚には武蔵をこの世から失うことに対する大きな悲しみがあり、同時に若者を愛した武蔵への供養に次代を担う優れた青年僧に代行させた方が適当だという気持ちもあったのではないか。この引導石から少し歩くと泰勝寺がある。この寺は、細川家の菩提寺で、境内には歴代藩主の墓地がある。初代と二代目の藩主の墓碑は素晴らしく、特に細川ガラシャの墓碑の前では人生の曲折に思いを馳せた。こういう立派な墓碑群の奥、荒れ果てた山道を少し登った所に歴代住職の墓地があって、その一隅に大淵、春山と並んで宮本武蔵供養塔があった。この塔は、古い五輪塔の残欠を集めて造られたものと伝えられ、特に武蔵の墓碑というわけではないらしい。ただ、武蔵供養塔が泰勝寺の聖域、しかも歴代住職の墓碑と並んで建っているという事実は重要だ。私の想像では、武蔵に対する大淵や春山の深い思い、武蔵の禅宗への傾斜と住職に比肩できる深い造詣、そして熊本藩主の武蔵に対する尊敬の念がこの聖域に武蔵供養塔を設けることを許したのではないか。このように考えると、武蔵の人間としての深さと分厚さを感じざるを得ないのである。

西の武蔵塚は、熊本市の西郊島崎7丁目にある。大学からはかなり距離があるため、タクシーを利用し、東荒尾というバス停で降りた。そこから林の中に少し入った所に寺尾家の墓地があり、その一角に武蔵の墓碑が建っていた。寺尾家は、二刀流を相伝する家柄で、名著『五輪書』は最高弟だった寺尾孫丞（まごのじょう）に宛てて書かれた。寺尾家は、このように武蔵と特別な因縁があるため、その墓地の一隅に師匠・武蔵の墓碑を設けても不自然ではない。師弟関係から武蔵との人間的な結び付きが強かったのだろう。西の武蔵塚の墓碑には武蔵の戒名の隣に美しい女性名の戒名が寄り添うように刻まれている。その名は「花月清円信女」と読み、没年は消えそうだが、寛文3年（1663）と読み取れる。武蔵は、正保2年（1645）に没したから、18年後に埋葬されたものである。墓碑は、ちょうどお結びのような形の高さ幅とも1メートル程度の自然石で、全く手を加えていない石の表面中央に二人の戒名が並んで刻まれていた（写真-3）。

それにしても絵のように美しい言葉を連ねた戒名で、恐らく何かを象徴しているのだろう。一体それは何か。武蔵は、『独行道』に「れんぼの道思いよる心なし」と書いている。仮にこの言葉が本当だとして、この女性が18年後に亡くなった時、武蔵の最高弟だった寺



【写真－3】西の武蔵塚にある墓碑

尾が墓碑にこのような形で戒名を刻むことを適当と判断する何かがあったことだけは間違いないのである。武蔵が死の床にいた時の彼女に対する気持ち、彼女の武蔵を見送った際の気持ちとその後の18年の生活、そしてその彼女を見守りつづけた寺尾と墓石に彼女の戒名を刻ませた彼の措置。それら全ての気持ちが美しい戒名の文字に凝縮しているのだろう。だとすれば、冷徹な剣客としての武蔵の影には、温かい人間性が隠されていたことになる。この事実と「一劔護民」という言葉とを重ね合わせた所に浮び上がる武蔵像こそ、温かい血がたぎる真の武蔵その人ではないか。私は、このお結び型の、自然で飾らない墓碑を見て、そんな観に打たれたのだった。

私は、この日、さらに島田美術館を訪ねた。この美術館は、西の武蔵塚からさほど遠くない島崎4丁目にあって、武蔵ゆかりの美術品を展示していることで有名である。武蔵の絵

画や彫刻には心引かれるものがあるが、特に注目したのは武蔵の腰に差した刀を模した木刀と刀の鍔だった。木刀は、細身で軽く作られ、鍔も同様に軽いのである。つまり、二刀流では片手で刀を振らねばならないので、重い刀では不利になるわけだ。武蔵は、このように刀剣という道具についても様々な工夫を巡らしていたわけである。当然のこととは言え、取材して初めて腑に落ちた事実ではあった。

2－3 霊巖洞と屋敷跡

翌日（9月8日）は、快晴だった。沖縄方面に台風16号が来ているのに「熊本はこんなに晴れ渡って、本当に良いのだろうか」。そんな思いが頭をよぎった。

最初に武蔵の屋敷跡を訪ねたくて、熊本城内を散策した。敷地内にNHKの熊本放送会館があるが、その辺りは千葉城跡と呼ばれ、熊本城発祥の地なのである。屋敷は、千葉城跡の南側にあったらしく、武蔵が使ったという井戸跡もあった。この辺りからは、熊本城の天守閣が間近にそびえ立っている。武蔵という人は、常に藩主細川公の側近くにいたことが、この事実からはっきり分かる。必要があれば、何時でも、例え夜であっても藩主に会え、意見を伝えることが出来たのである。逆に細川公も何時でも武蔵を呼び出せた。細川公と武蔵とは固い信頼関係で結ばれていたことは間違いない。

この後、私は武蔵が『五輪書』の筆を初めて下ろした霊巖洞を訪ねた。霊巖洞には熊本バスセンターから「温泉センター」行きのバスで30分ほどかかる。温泉センターとは、夏

目漱石が『草枕』の舞台とした「小天（おあま）温泉」のことである。霊巖洞は、バスセンターと小天温泉の中間辺りに位置する金峰山の山頂付近にある。私は、金峰山麓の最寄りのバス停で降りた。そこから山道を少し登った所に雲巖禅寺という南北朝の頃に開かれた古寺があって、霊巖洞はその境内の奥にあった（写真－4）。武蔵が訪ねた頃は、この世から隔絶した霊気が漂う洞窟だったに違いない。はるか向こうは島原湾で、かすかに見える高峰は天草の山々である。武蔵は、ただ一人この岩窟に座し、自らの人生の意味を自問自答した。こうして武蔵は自らの哲学を深め、広げた。武蔵はこの世に背を向け、思索の中に沈潜した。武蔵の眼前に広がるのは、俗界としての熊本ではない。島原の海、そして無限の空であった。だが、どうだろう、『五輪書』の生き生きとした文体は。武蔵は、この世と真っ正面に対決していたのだ。文章



〔写真－4〕『五輪書』の想を練った霊巖洞

は、ほとぼしり出るように心から流れ出た。そうでなければ、あのような文章は書けない。私の想像では、五輪書はかなり短時間で完成した。武蔵は、霊巖洞で長い思索の時間を持ったのだ。武蔵は、こよなく霊巖洞を愛した。ここで座禅を組むと、様々な思いが脳裏を駆け巡り、時間の経つのを忘れた。体調は次第に衰え、藩主も門弟達も武蔵がこのまま洞窟の中で死ぬのではないかと心配した。ついに、細川公は心配のあまり、臣下に命じて武蔵を屋敷に連れ戻させ、付き添いを付けて看病させた。こうして、一代の剣客武蔵は、畳の上で大往生を遂げることができたのだった。

霊巖洞には、武蔵の畏友沢村大学の「逆修」の文字が彫られていた。逆修とは、生前に自分の死後の冥福を祈る行為である。沢村は、熊本藩の家老職を勤めた人だが、名だたる豪傑で、戦場での働きは目覚ましかった。武蔵とは気が合った者同志で、霊巖洞を教えたのも沢村だったと伝えられている。

私は、その後、霊巖洞に端座した武蔵の姿に想像を巡らしつつ、田舎道を5キロあまり歩き、疲れたので適当なバス停から熊本に戻った。それから、もう一度武蔵の屋敷跡を訪ね、熊本城の天守閣を仰ぎ見た。私が追及する武蔵像が何となく姿を現してくれたような気がしていた。

第3節 武蔵の生涯と人間像

武蔵は、『五輪書』地之巻の冒頭で自分の生涯を600字あまりの短い文章で簡潔に書いて

いる。この自伝（略伝ではあるが）が何故か従来、疑問視されて来た。しかし、誇り高い武蔵本人が遺書のように書き記した自らの足跡である。私は、略伝を素直に肯定する立場に立つ。幸いにも一昨年末から昨年（02～03）にかけて起こった武蔵に関する出版ブームの中で、優れた研究書が次々に刊行された。

私は、次の三冊を高く評価する。

魚住孝至著『宮本武蔵－日本人の道－』（ぺりかん社、02年12月）

宮元健次著『芸術家 宮本武蔵』（人文書院、03年3月）

井上智重・大倉隆二共著『お伽衆 宮本武蔵』（草思社、03年8月）

この外にも前田英樹著『宮本武蔵「五輪書」の哲学』（岩波書店、03年3月）や少し古いが久保三千雄著『宮本武蔵とは何者だったのか』（新潮選書、98年5月）は、示唆に富む貴重な業績である。武蔵の生涯は、これらの書物を参考にしつつ、武蔵の生きた時代を考慮し、先に述べた略伝を基本に、小倉の顕彰碑の碑文と突き合わせると、かなり正確に理解できる。

武蔵の人間像も武蔵自身が書いた文章を基に考えるべきである。武蔵は、自らの人間像を『五輪書』や『独行道』の中にある意味で鮮明に書き留めている。

本節では以上の視点に立ち、武蔵の生涯と人間像に迫りたい。

3－1 武蔵の生涯

武蔵の生涯は、五つの期間に分けて考えると、養父無二斎の夢を受け継ぎ、剣豪として名をなさんとした青年時代から、壮年時代になって活人剣に目覚め、やがて一劔護民を志向するようになるまでの軌跡が鮮明になる。

〔第1期〕幼・少年時代（誕生～10歳）

魚住の説に従い、武蔵は天正10年（1582）に誕生したと考えたい。織田信長が明智光秀に滅ぼされた年である。武蔵の家系は、足利幕府を支えた武門の名家・赤松一族に発する。赤松家は、播磨・美作・備前の守護職であった。土岐・京極・一色・山名と共に幕府の侍所頭人を兼ね、幕府宿老として権勢を競った。

赤松一族は、領地に対する将軍の措置に恨みを持った当主満祐が6代将軍足利義教を暗殺した「嘉吉の変」（1441年6月24日）の後は凋落し、武蔵が誕生した頃は見る影もなかった。当時は「赤松」の姓を避け、「田原」と称していた。生地は、播磨の米墮村（よねだむら）（兵庫県高砂市米田町）で、幼・少年時代をこの地で過ごした。出自が播磨の守護・赤松一族であったという事実は、武蔵の生涯に有形無形の影を落とした。

ここで「嘉吉の変」について、簡単に触れておきたい。この事件は、赤松一族の所領問題をめぐる内紛が発端であった。赤松満祐が父親から播磨守護職を相続する際、満祐を嫌った4代将軍義持は、お気に入りの近習で赤松一族の有力者につながる赤松持貞に播磨守護職を与えようとした（今谷明著『足利将軍暗殺－嘉吉土一揆の背景－』）。この措置は、幕府の重臣達の執り成しで事なきを得たが、満祐の将軍に対する遺恨は深く、6代将軍義教の時代に同じような問題が再燃したため遂に将軍暗殺の挙に出た。井上・大倉著『お伽

衆『宮本武蔵』に出ている系図（31頁）によると、武蔵は赤松持貞の血筋につながる。嘉吉の変の後、赤松家は没落し、持貞の系統も例外ではなかった。

将軍暗殺は、異常な事件ではあるが、武蔵が活躍した戦国末期という時代に於ける将軍（あるいは支配者）と武将（武士）との打算的なクールな関係を象徴する意味を持つ。武蔵という人は、少なくとも生まれながら「一介の剣豪」を超えた複雑な時代背景を背負っていたことだけは間違いない。

〔第2期〕修業時代前期－新免無二斎の下での文武修業（10～20歳）－

天正11年（1591）、武蔵は赤松一族随一の剣客新免無二斎の養子となった。秀吉の朝鮮侵攻が始まった年で、まさに大動乱期の真っ直中である。

無二斎は、15代将軍足利義昭の兵法師範・吉岡憲法と三度勝負して二度まで勝った剣客であった。おそらく1570年頃のことではないか。無二斎がこの頃20才代半だったとすれば、武蔵とは年齢差が35歳程度である。無二斎が吉岡憲法に勝ったという事実は、彼にとって大きな意味があった。将軍義昭は、当時、失墜した幕府権力を回復させるため様々な裏工作を進めており、幕府再建を果たす可能性も皆無とは言えなかった。無二斎は、没落した一族の再興に大きな夢を抱いたことだろう。彼の夢は、将軍の指南役だったのかもしれないが、義昭が信長に降伏したことで数年にしてつuitえた。足利幕府が倒壊したのだ。嘉吉の変は中世的な武士社会の秩序の枠内の内紛に過ぎなかったが、義昭の降伏は足利幕府にとどめを刺す事件であって、時代の大転換を意味した。

武蔵は、幼い頃から武道に天性の素質を備え、一族きっての剣客・無二斎の元で修業することになった。無二斎は武蔵の才能を認め、武蔵は養父の夢を受け継ぐことになった。養家は、美作の宮本村（岡山県英田郡大原町宮本）にあった。武蔵は無二斎の下で文武両道の修業に打ち込み、終生、無二斎を師として尊敬した。そのことは、『五輪書』の中で自らを「新免」と名乗っていることで分かる。

武蔵は、この時期の最後の段階で関ヶ原の合戦（1600年）に養父無二斎と共に参戦した。彼等は、黒田官兵衛の麾下に属し、九州の石垣原（別府市内）の合戦に参加した。黒田家は赤松麾下の武将の家柄で、官兵衛は姫路城主だったこともある。無二斎父子は、黒田家とは赤松との縁で結ばれていたのである。

〔第3期〕修業時代後期－武者修業時代（21～29歳）－

武蔵は、関ヶ原の合戦の後、武者修業の旅に出る。武者修業時代は、京都の吉岡一門との三度に亘る試合に始まり、巖流島の佐々木小次郎との決闘で幕を閉じた。武蔵が吉岡一門を徹底的に倒したという事実は、武蔵が生きた時代を背景にした時、社会的な意味はほとんどなかったのかもしれない。家康が慶長8年（1603年）征夷大将軍となり、江戸に幕府を開いた。時代は、豊臣から徳川に転換した。足利幕府の最後の将軍義昭は、既に没していた。吉岡一門は、かつては足利将軍の指南役だったが、当時、そのことには社会的な意味はほとんどなかった。武蔵は、かつて養父の無二斎がしたように、吉岡一門を完膚なきまでに打倒することで、人生の檜舞台へのスタート・ラインに立ちたかったのだろう。そして、同時に無二斎に自分も同じ道を歩み、その夢を受け継ぐことを知らせたかったの

ではないか。かつて足利幕府の将軍を暗殺した赤松一族につながる武蔵は、今や足利幕府の剣術指南役を任じた吉岡一門を倒した人物であった。

武蔵は、過去のしがらみから離れて、新しい時代に雄々しく猛々しく突貫して行く。剣豪・武蔵の視野には一体何があったのか。少なくとも新しい徳川の時代というものがあったことは間違いないのではないか。その先に、徳川幕府の剣術指南役があることは、自然な成り行きである。足利将軍の指南役であった吉岡一門を倒した剣豪なのだから、これ以下ではプライドが許さない。武蔵は、23歳で『兵道鏡』を執筆し、円明流を創始した。武蔵は、思慮深い理論家であって、若くして一流を考案し、それを多くの武士に伝授する才能に恵まれていた。ここからは、極めて高い教養を身に付けた人物だったことが想像できる。少なくとも武蔵は、常に武士の指導者たらんとしていたのであって、刀のみに頼る思慮の浅い人物とはほど遠い人だったのである。武蔵は、江戸に出て幕府指南役への登用の可能性を模索し、さらに尾張藩でも同様の道を探ったが、いずれも武蔵の夢は果たせなかった。天才は、しばしば世に受け入れられないものだし、また赤松一族につながるという武蔵の出自も警戒されたのではないだろうか。それに、何よりも武蔵の思想が深まって、剣道の限界が見えて来たことが武蔵の歩む道を変えさせた。この姿勢が、巖流島の佐々木小次郎との対決を境に武者修業時代にピリオドを打たせ、剣道哲理の追及から民を護る政治へと向かわせた。

〔第4期〕姫路・明石時代－活人剣の開眼（30～50歳）－

武蔵は、30才代の初めは大阪冬の陣（1614年）、夏の陣（1615年）と戦場を駆け巡った。冬の陣では、養父と共に木下延俊の麾下に属し、九州で戦った。木下家は、秀吉の北政所につながり、姫路を領したことがある。延俊は、後に豊後日出城主（国東半島の一部、小倉に近い）となった。夏の陣では、徳川方の水野勝成の配下として出陣した。勝成の嫡男・勝重の陣にいて、騎馬武者の一人として目覚ましい働きをした。この時、徳川方の多くの武将の知遇を得た。戦後、水野家の懇望にも関わらず仕官せず、活動拠点を姫路と明石に置いた。いずれも、赤松一族の故地・播磨である。武蔵は、本来の原点に戻ったわけで、これは自然な成り行きだと言えよう。ただ、播磨、特にその拠点たる姫路は、幕府も認める西国支配の要衝であった。このため幕府と言えども、この地に根を張った赤松一族の末裔を無視することはできない。それに、武蔵の剣豪としての、あるいは戦場での豪傑としての勇名は広く知れ渡っていた。武蔵は、姫路藩主・本多忠政・忠刻に認められ客分（藩主の相談役）となり、さらには明石藩主・小笠原忠真の知遇を得て、同藩でも客分になった。武蔵は、こうして有力大名の相談役として政治に影響を与える力を持つことになる。武蔵は、姫路藩に養子の三木之助を、明石藩に同じく伊織を出仕させた。彼等はいずれも優秀で、藩主の寵臣となった。武蔵は、単なる剣豪の思考能力を超えた複雑な人物だったことは間違いない。特に伊織は、武蔵の甥であった。徳川家につながる小笠原忠真は、その後、小倉に移り、九州探題の役割を担うことになった。伊織は、極めて若くして首席家老に昇進した。その影には、武蔵の側面的な働き掛けがあったのではないか。武蔵と伊織との関係は、無二斎と武蔵との関係と同じだったろう。

この時期、武士を捨てて禅宗の僧侶になった人に鈴木正三がいる。勇猛な武士だった正三は、人間の浅ましい姿を見続けて武士を捨て、人々が安心して生きられる社会の創出に生涯を掛けた。武蔵の大阪夏の陣以後の人生も正三のそれに通底するものが認められる。武蔵は、この時期、剣道哲理の研鑽だけでなく、書・絵画・彫刻などの制作、さらに、明石の城下町の都市計画や造園にも携わり、これら全ての分野に於いて天才的な業績を残したのであった。こうして、円熟の境地に達した武蔵は、50歳にして活人剣に開眼した。

〔第5期〕小倉・熊本時代－『五輪書』の執筆（51～62歳）－

武蔵は、小笠原忠真の小倉への移封に伴い、伊織と共に小倉に移った。その後、天草の乱（1637年）が起こった。武蔵は、小笠原忠真の軍に加わり、伊織の側にあって自らは軍監を任じた。しかし、原城の石垣の下で投石を脛に受けて負傷し、実際の戦闘には参加できなかった。それでも、幕府方の武将の中では、大きな存在だった。この戦いの後、細川藩の客分になった。九州の大藩、筑前福岡も肥後熊本も、赤松一族とはつながりが強い藩であった。ここでも武蔵の出自が無関係ではない。

藩主の細川忠利は、武蔵を遇するに名誉をもってした。藩主直属の相談役で、熊本城の天守閣の側に屋敷を、さらに鷹狩りの特権をも与えた。このような待遇を与えたのには、武蔵が九州探題・小倉の小笠原藩の首席家老の父であるという事実も見逃せない。フィクサーとしての力を持っていたのだろう。武蔵は、熊本の地で畢生の名著『五輪書』を書き、大勢の門弟を育てた。二刀流は、九州で伝承された。

武蔵は、その生涯に4度戦場に出たが、一度も敗軍に属したことはない。最近の研究によって、この事実が次第に分かって来た。情勢を冷徹に読み切る武蔵にすれば、当然の帰結である。

3－2 武蔵の人間像

この小節では、『武蔵九則』と『独行道』を武蔵が到達した「心は空也」という究極の哲理を基に考察し、武蔵の人間像に迫りたい。

『武蔵九則』とは、『五輪書』の『地之巻』に書かれた9項目の原則である。武蔵は、自分の兵法の習得は、次の九原則を身につけることで可能だと言う。

- 即ち、第一に、よこしまになき事をおもふ所 （第1則）
- 第二に、道の鍛練する所 （第2則）
- 第三に、諸芸にさはる所 （第3則）
- 第四に、諸職の道を知る事 （第4則）
- 第五に、物毎の損徳をわきまゆる事 （第5則）
- 第六に、諸事目利を仕覚ゆる事 （第6則）
- 第七に、目に見えぬ所をさとってしる事 （第7則）
- 第八に、わづかなる事にも気を付くる事 （第8則）
- 第九に、役にたたぬ事をせざる事 （第9則）

『独行道』とは、武蔵が死の間際に弟子に遺すために書いた21項目に及ぶ人生訓である。

この人生訓は、孤独に歩んで来た武蔵の人生が基礎になっている。

- 即ち、一、世々の道をそむく事なし (第1項)
- 一、身にたのしみをたくまず (第2項)
- 一、よろずに依怙の心なし (第3項)
- 一、身をあさく思、世をふかく思ふ (第4項)
- 一、一生の間よくしん思はず (第5項)
- 一、我事において後悔をせず (第6項)
- 一、善惡に他をねたむ心なし (第7項)
- 一、いづれの道にも、わかれをかなしまず (第8項)
- 一、自他共にうらみかこつ心なし (第9項)
- 一、れんぽの道思いよる心なし (第10項)
- 一、物毎にすきこのむ事なし (第11項)
- 一、私宅においてのぞむ心なし (第12項)
- 一、身ひとつに美食をこのまず (第13項)
- 一、末々代物なる古き道具所持せず (第14項)
- 一、わが身にいたり物いみする事なし (第15項)
- 一、兵具は各(格)別、よ(余)の道具たしなまず (第16項)
- 一、道においては、死をいとはず思ふ (第17項)
- 一、老身に財宝所領もちゆる心なし (第18項)
- 一、神仏は貴し、神仏をたのまず (第19項)
- 一、身を捨てても名利はすてず (第20項)
- 一、常に兵法の道をはなれず (第21項)

さて、武蔵が到達した究極の哲理とは何か。私は、『五輪書』の『空之巻』の最後に書かれた次の文章だと考える。

「空は善有り悪無し、智は有也、利は有也、道は有也、心は空也」

含蓄深い文章だ。しかし、難解である。神子侃訳『宮本武蔵・五輪書』（徳間書店）の現代語訳には、次のように書かれている。

「空という心には、善のみがあって悪はない。兵法の知恵、兵法の道理、兵法の精神、こうしたものがすべて備わることにより、はじめて一切の雑念を去った空の心に到達することができる。」

私には、この解釈が釈然としない。私は、次のように解釈したい。

「空は、善のみがあって悪はない。知識（智）は、善惡が有る。効用（利）は、善惡がある。道理（道）は、善惡が有る。心は、空である。」

ここで、「武蔵が言う「善」とは何か」を吟味する必要がある。武蔵は、二分法を了とする単純な人ではない。『地之巻』の中で「空」について「道理を得ては道理をはなれ、(略)おのれと（自然と）自由ありて（を得て）」と言うほどの人である。道理を得たとしても、そこに埋没せず、道理を突き放して直視しなければ、悪にのめり込む場合も起こり

得る。知識も効用も道理も時間の経過や状況の変化に応じて有為転変している。自由は、あらゆる紐帯から解き放たれたとき初めて得られる。武蔵は、そういう人であった。だからこそ、武蔵の言う「善」は、「悪」の反対語ではない。「悪」に対しては「正、あるいは良」を対置して、「善」は「正と悪」という二分法の次元を超えた高く広く深い概念であると理解すべきだろう。空はそうした善の気で満たされているからこそ、心は自然に拘束から解かれて自由になり、全てが鏡に写すようにはっきり見えるのである。ここに「心は空也」の意味があり、また「心意二つの心をみがき、観見二つの目をとぐこと」が大切になる理由がある。私は、“兵法者としての武蔵は、空なる心を無意識の内に自分の心とすることが念願だった”と思う。そうでなければ、自らを無為な死に追い込む可能性があるからだ。空なる心を自らの心とすることは簡単ではない。「世の大かね（時間を超越した人間としての秩序）にあわせて直ぐなる所を見定め」たうえ、自分の心が無意識の内に自然とそれに合わせて行く柔軟なものとなり、そのような心が知らず知らずの内に発露するものでなければならないのである。

武蔵九則は、このような「空なる心」の体得の秘訣を簡潔に述べたものだ。兵法にあっては、対戦した相手に「勝つ」ことが絶対的要件である。そのために、自分と相手との相互関係を正確に観察する必要がある。生死をかけた関係だから、そこにあるものは、あくまでも自分を中心にした主観的で主体的な関係性である。ここで、“空なる心は、主観的關係性から生まれる”ということ忘れてはならない。

武蔵は、第1則に「直ぐなる所を自分のものとする」ことを上げる。この点が全ての基本になる。つまり、時間を超越した人間としての秩序を自分のものとするを意味すると共に、このことが『空之巻』で言う「兵法を広くおこない、ただしく明らかに、大きな所を思いとる（実現する）」ために必要な要件なのである。

第2則から第4則までは、一体と考える必要がある。何故なら、「兵法を広くおこなう」ためには、兵法の鍛練は当然のこととして、兵法以外の諸芸・諸職の道を知る必要があるわけである。ここには、二分法超越思想が前提にある。正と悪を超えた所に善があるのだから、当然ながら兵法の道とそれ以外の道を超えなければ次元を超えた広い世界に出られず、兵法を広くおこなうことも出来なくなるわけである。第5則から第9則までは、対象の正確な観察と評価に関する原則である。ここで敢えて注意を促したいことを3点書いておきたい。第1は、第5則の「物毎の損徳」を「損得」と取り違えてはいけないこと。「損徳」は、「徳、つまり長所を損じること」であって、「利害得失」を意味するわけではない。武蔵は、「物には全てそれに応じた長所があり、その長所を活かすことが大切である」と言うのである。第2は、第6則の「仕覚える」の意味。この意味は、「観念的ではなく、経験を通して身につける」ということではないか。第3は、第9則の「役に立たぬこと」の意味。「役に立たぬこと」とは、例えば「武芸を売って利益を得るようなこと」である。武蔵は、『地之巻』の中で、「兵法の道に、色をかざり（略）術とてらい（略）利を得んとおもう」ことを戒めている。「空の心」を己が心としたい武蔵は、このようなことを「役に立たぬ事」として退ける。第9則は、功利的な計算の大切さを言っているわけ

ではないのである。

武蔵九則の構造は、三つの部分からなっている。先ず根本原則が第1則で、根源的な方向性を示す原則。次が第2則から第4則までで、二分法を超越した高く広い次元に至る手段を示す原則。最後が第5則から第9則までで、対象の正確な観察と評価に絶対不可欠な秘訣を示す原則。ここで示される構図、即ち武蔵の考え方の枠組みは、兵法に限られるものではなく、普遍性を持つものと言えるだろう。

『独行道』は、このような構図を自分の人生に引きつけて、分かりやすく教えた人生訓である。『独行道』を世俗的な处世訓と見なす説もあるが、そんな軽いものではない。遺書のように書かれた深い意味を持つ作品と位置付けるべきだろう。

第1項の「世々の道」は、過去・現在・未来に通じる時間を超えた道であって、「世の大かね（秩序）」に通底する。この点から前述の「時間を超えた人間としての秩序」という意味が出て来る。武蔵は、このような人間としての絶対的秩序にそむかないために、「自分の利害よりも人の世を深く思い（第4項）、欲心を押さえ（第5項）、悔いの無い人生を心がけ（第6項）、対決の時は死ぬことを恐れず（第17項）、自力を信じよ（第19項）」と言う。

武蔵が自らの死に値すると考えるものは、「名（名誉）と利（世々の道に应じる利益）を得ること」である（第20項）。この意味で、第17項と第20項は対をなしている。名利のために「優れた武器を持つことに固執し（第16項）、兵法の道を日常化することを厭わない（第21項）が、その他の様々な精神的欲求、財産の所有欲、衣食住に関する欲望は切り捨てよ（第2, 3, 7～10項、及び第11～15, 18項）」と言う。武蔵という人はこういう人生を歩んで来たのである。

ここから浮び上がる武蔵の人間像は、まるで求道僧そのものである。だが、人間として二分法超越の高い境地に昇るには、激しい心の葛藤と戦い、克服する必要があるだろう。武蔵という人は、様々な欲求・欲望を切り捨てるために凄まじいまでの人間的な悩みを悩んだことだろう。この深い悩みが武蔵をして厳しい決闘に駆り立て、さらに諸芸・諸職の道へ誘い、やがて「一劔護民」の道に向かわせたのだ。

第4節 武蔵の生と死～二刀流と武士道～

武蔵は、自分の剣法を『五輪書』の『地之巻』の冒頭では「二天一流」と、最終巻の『空之巻』の冒頭では「二刀一流」と書いている。「二天一」と「二刀一」の違いは、「天」が「刀」に置き換わっていること。武蔵がこの違いに気付かないはずはない。何しろ自分の流派の名前なのだから。意図的に変えたとすれば、それなりの意味が含意されていると考えるべきだろう。

「二天」とは、日天と月天、つまり太陽と月を意味する。そして、太陽と月は、宇宙そのもの、同時に生命の根源を象徴する。墓碑（写真－2参照）に刻まれた円は、この「二天」を表している。武蔵にとって、「二刀」は「二天」でなければならないのである。それは、何故なのか。

武蔵は、自らの流派を最初「円明流」と名づけた。ここで言う「円」の意味がより具体的になって「二天」となり「二刀」となった。「円」は、初めも終りもなく永遠に循環する無始無終の、自分を円の中心に置けば大きくも小さくもなる変幻自在の形である。武蔵は、「二刀」を使って、このような円構造（あるいは球構造）を自分の回りに創り出したと考えた。このような円（ひいては球）構造を創り出せれば必ず「勝つ」、そして「生きる」ことが出来る。二刀流は、「生きる」ために考えられた究極の剣法であり、その象徴が「円」である。私は、こう考えたい。

余談だが、この「円」に関連して付言しておきたいことがある。西の武蔵塚の墓碑に刻まれた「花月清円信女」という戒名には、「月」と「円」という二文字が入っている。この二文字は、武蔵の二刀流を象徴する文字だから、言うまでもないことだが、この女性は武蔵とは堅い絆で結ばれた人であった。美しい物の象徴として「雪月花」という言葉がある。この言葉を逆向きに書けば「花月雪」である。この「雪」に相当する部分が「清円」になっている。想像をたくましくすると、この女性は、淡雪のようにはかなく消えた（つまり、この世を去った）のだろう。

武蔵は、『独行道』第10項に「れんぼの道思いよる心なし」と書いている。だが本当はどうだつたのだろうか。私には武蔵のような哲人が敢えて書く必要もないことを書いているように思える。だが、武蔵は、芸術家として豊かな才能を持つ人だった。武蔵は、絵師であり、彫刻家でもあったから、美に対しては鋭敏な感覚を持っていた。武蔵は、恋慕の思いを強く封じたに違いない。そのことが『独行道』の一行になった。こうして、戒名から想像する限り、彼女の恋は淡雪のようにはかなく消えた。熊本のことである。降雪があっても、いつも淡雪で、直ぐに消えるのである。私がこの女性の名前に「清」を当て、「円」に武蔵を仮託すれば、あまりに想像に過ぎるとお叱りを受けるだろう。何の根拠もないのだが、このように想像することで、武蔵の温かい人間性が伝わって来る。だが私は、この温かい人間性に武蔵の二刀流の哲理が潜んでいると考えるのである。何故なら、武蔵は、どんなことがあっても「生きよ」と主張している。『地之巻』の「この一流、二刀と名付くる事」の中で、次のように書く。

「一命を捨つる時は、道具を残さず役にたてたきもの也。道具を役にたてず、こしに納めて死する事、本意に有るべからず。（略）。片手にて太刀をつかふものなれば、両手にて太刀をかまゆる事、実（まこと）の道にあらず。」

武士は、大刀と脇差を腰に帯びる。武蔵は、武士は命をかけた戦にあっては、命を守るために身に帯びた全ての武器を使うべきだと主張する。例えば、脇差を抜きもせずに死ぬことは、不本意な死だと考えるのである。武蔵は、太刀は元々片手で振るもので、両手で一本の太刀を持つようなことは邪道だと言う。武蔵の考え方の基本は、あくまでも「生き抜くこと」にある。

武蔵は、人間が死ぬ時は、本人が「今こそ死ぬべき時だ」と「思いきる時」でなければならないと言う。その時が訪れるまで、人間は死んではならない。あらゆる武器を総動員して、「生き抜く」決意がなければならないのである。武蔵は、やはり『地之巻』の最初

の方で、このように書いている。

「武士の思ふ心をはかるに、武士はただ死ぬるという道をたしなむ事と覚ゆるほどの儀也。死する道においては（略）出家にても、女にても、百姓已下に至るまで、義理をしり、恥をおもひ、死する所を思ひきる事は、その差別なきもの也。」

ここで、「死ぬるという道をたしなむ事」とは、「死をいさぎよくすること」を意味する。注意したい箇所は「死する所を思ひきる事」と「その差別なきもの也」という2箇所である。前者は「これこそ死に値する、命を失っても悔いのない時だと決心する事」ということで、後者は「そのような決心は、（武士に限らず、どんな人でも）変わらない」という意味である。武蔵は、人間、少なくとも武士たる者は、そのような時まで死んではならない、生き抜かなければならないと主張するのである。こうして「生き抜く」ために、武蔵が考案した剣法こそ二刀流である。

私は、剣道には全くの素人だが、主観環境学の体系化という課題に照らし、私独自の視点で武蔵の二刀流を「二分法超越思想」を剣法の上に具体化したものと考えている。実は、武蔵の二刀流の哲理は、主観環境学の基本的な思想形成に重要な示唆を与えるものと考えているのである。

そこで私の考える二刀流の意味である。一刀流は、一本の刀を両手で振るのだから、自分の前に描ける図形は基本的には直線と平面、つまりせいぜいで二次元である。勝負は、刀の長短と「振る」または「突く」時のスピードによって決まる可能性が高い。二刀流は、一方の手に大刀、他方の手に小刀を持って振る、あるいは突くので、描く図形は立体になり、さらに大刀と小刀の時間差攻撃によって間断なく攻め続けることができる。つまり、立体と時間差を考えると四次元なのである。従って、二刀流を完璧に体得できれば、自分の周囲に円形あるいは球形の鉄壁を巡らし、如何なる攻撃にも対抗できる。まさに、絶対に死なない剣法となる。

私は、ここまで考えて「二刀一」流の「二刀一」という部分は、「二は一」と読むのではないかと思った。武蔵の言葉感覚は、誠に自由奔放である。日本のお箸と西洋のナイフやフォークの違いを考えて欲しい。前者は二刀流、後者は一刀流である。お箸は、二本を一体的に運動させ、どんな状況の下でも突く、切る、挟むことができる。ところが、ナイフは切るだけ、フォークは突くだけ、スプーンは掬うだけで、役割が特化している。二刀流と一刀流にも同じような違いがあるのではないか。

ところで、武蔵は生きよと言う。武蔵の武士道は、如何なるものだったのか。武蔵は、死においても武士を特別視していない。「士農工商」の区分は、武蔵においては単なる職分である。『五輪書』の中で「凡そ人の世を渡る事、士農工商とて四つの道也」と書き、「兵法の道を大工にたとへたる事」という一節を起こしている位である。そこでは、人々はある意味で平等に扱われている。この点は、武蔵の生きた同時代に、武士を捨てて禅僧になり、多くの人々に生きる道を示し続けた鈴木正三も同じであった。江戸時代初期は、社会構造が流動的で、士農工商の区分が身分制度として固定化していなかった。例えば天草の乱は、武士の支配体制を揺るがす内乱であって、武士階級と言えども絶対の支配階級

であり続けられるわけではなかった。だからこそ、平等意識が深く浸透していたのだろう。有名な『葉隠』が書かれたのは、武蔵の時代から百年ほど後で、ちょうど八代将軍吉宗の頃に当たる。この頃になると、士農工商は固定化し、偏狭な武士道の理念が生まれて来る。新渡戸稲造の『武士道』も、このような歪んだ武士道につながるもののように思える。武蔵は、「武士と云ふは、死ぬ事と見つけたり」などとは決して言わない。逆に、「今こそ死ぬべき時」と決断できるまでは、どんなことをしても生き抜かなければならないのである。「生きる」という点に力点が置かれていたという意味では、正反対の発想に立つものだったのである。

第5節 武蔵の現代的意義～主観環境学への示唆～

武蔵は、剣法という形で二分法超越思想を具現した。私は、たまたま武蔵の二刀流の哲理が私の主観環境学の構造と似ていることに気がついた。『五輪書』を読み直して、一層その思いを強くした。この論文を書いたのも、そのためである。

主観環境学では、環境汚染の悪影響を受けるのも、それを克服するのも、全ては一人ひとりの人、つまり自分次第だと言う所から出発する。自分が中心に位置づけられる。その自分が環境汚染をもたらし元凶である様々な歪んだ文化と対決し、歪みを制度的、組織的に正して行く。元凶の最たるものは、利潤の前には生命すら犠牲にしかねない社会経済システムである。はたまた、そのシステムを受け入れざるを得ない一人ひとりのライフ・スタイルである。このような考え方は、ある意味で制度経済学、あるいは進化経済学に通じている。この観点からすれば、主観環境学は生命（いわば人間の内的環境に関わるもの）を守るという視点を中心に据えた制度経済学とも言えるだろう。この戦いに勝ち抜くためには、武蔵の言う「空なる心」が必要である。それでは、一人ひとは二刀の代わりに何を持って戦うのだろうか。一方に公セクターの一員としての立場を、他方に私セクターとしての個人の立場を持つとしよう。両方の立場を使い、歪んだ文化システムや汚染した外的環境が自分の内的環境（生命）に襲いかかる様々な攻撃と戦い、勝ち抜く。勝利の代償は、文化の歪みを正し、環境汚染を克服し、その成果を未来に継承することである。かくして、幸せな社会の発展をより確実なものにするのである。このような学問体系の構築に武蔵の哲理は、様々な示唆を与えてくれる。武蔵は、私にとって大いなる先達であり、今なお生きている人なのである。

(2004年12月19日攔筆)